ダンガンロンパ　希望絶望儚き夢

瑠芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダンガンロンパ　希望絶望儚き夢

【Ｎコード】
Ｎ６５４０Ｑ

【作者名】
瑠芽

【あらすじ】
「超高校級の」と呼ばれている人々が集められた希望ヶ峰学園。そこで繰り広げられる仲間同士の殺し合い、裏切り・・・時に笑いあり・・・すべては黒幕が仕掛けたわな。いったい何人の生徒がここから脱出できるのか・・・完全オリジナルストーリー

超高校級の人々

一人目
超高校級の童顔
夢川紗音（ゆめかわしゃのん）

見た目すべてが小学生そのものでどこへいっても間違われる。
友達と遊ぶ待ち合わせを駅でして待っていたら毎回警官に声をかけられるほどだ。

二人目
超高校級のサッカー選手
赤森海人（あかもりかいと）

中、高で決めたシュートは１０００本以上、プロからのスカウトもきているが練習が大嫌い。
しかし、彼が出ている試合では毎回１０点以上の差がついて勝利する。

三人目
超高校級の女優
二宮香織（にのみやかおり）

雑誌、テレビ、その他いろいろなところで活躍。
男子高校生の間では女神とも称されるほどの美貌の持ち主。

四人目
超高校級のハッカー

倉持紅葉（くらもちもみじ）

米軍、ロシア軍、その他いろいろな極秘機関の情報を奪っている天才ハッカー。
見た目は小柄でおとなしそうだが、パソコンの前に立つと豹変する。

五人目
超高校級の貧乏
坂本晶（さかもとあきら）

この世で一番貧乏なのは？という質問に対し誰もが一番初めに名前を挙げる人物。
しかし、身長は１８０をこえるほどの巨漢である。

六人目
超高校級の弓道選手
藤田優花（ふじたゆうか）

この中で一番明るく笑顔が似合う女性。
しかし、弓を持つとその顔からは笑顔が消える。

七人目
超高校級のデザイナー
吉田拓海（よしだたくみ）

世界中のありとあらゆる服をデザインしている。
ブランド物になると軽く１０万はこえる代物もある。

八人目
超高校級の漫画家

渡辺春菜（わたなべはるな）

代表作は小学5年生のときに描いた「ＯＮＥ（ワン）　ＰＲＩＮＣＥ（プリンス）」
いまは売れたコミックが1億万部をこえる超高校級の漫画家である。

九人目
超高校級の不良
成島亜鬼斗（なるしまあきと）

日本の不良界のトップに君臨しチーム『出火瑠素華威（デビルスカイ）』のリーダーである。
最凶最悪の不良である。小柄で生徒会長の双子の結衣とは正反対。

十人目
超高校級の生徒会長
成島結衣（なるしまゆい）

中、高と6年間生徒会長をやっており、容姿端麗、成績優秀、人の前に立ちまとめる能力がある。
大胆かつ凶悪な双子の亜鬼斗とは正反対。

十一人目
超高校級のオタク
織田信二（おだしんじ）

マンガ、アニメ、ゲーム、パソコン、これらなら誰にも劣らない。
日本を代表するオタクである。

十二人目
超高校級の手品師（マジシャン）

河村茂（かわむらしげる）

全世界を飛び回るマジシャン。
中学のとき始めてやったマジックは人体切断マジックという驚異の男。

十三人目
超高校級の大食い
長谷部秀（はせべしゅう）

大食い選手権ナンバーワン、カレーを一人で１００人前は食べられるという。
しかし、普段はあまり食べず身長も１６０と小柄だ。

十四人目
超高校級の女王様
アリス・クリエナーデ

この世で一番美しいのは自分だと思っている。
大金持ちで可愛いのだが性格にかなり問題がある。
マニアックな人なら仲良くなれる。

十五人目
超高校級の＊＊＊
舞浜姫（まいはまひめ）

すべてがなぞに包まれた少女。
しかしものすごい才能の持ち主であることは間違いない。

始まりの前の始まり（前書き）

希望ヶ峰学園に集められた１５人の『超高校級』の生徒たち。

無事卒業をして人生の成功を手に入れることはできるのか

始まりの前の始まり

いま私は希望ヶ峰学園という『超高校級』の生徒が集められた馬鹿でかい学校の前に立っている。
私の名前は夢川紗音（ゆめかわしゃのん）。
認めたくはないが『超高校級の童顔』らしい・・・
なぜ私がこんな学校の前に立っているかというと、先日こんな手紙が届いたからだ・・・

『

夢川紗音様

このたびはおめでとうございます。
あなたは『超高校級の童顔』でこの学校に見事受かりました。

＊月＊日8時までに希望ヶ峰学園玄関ホールまでおこしください。
ここを卒業すれば人生の成功を保障いたします。

希望ヶ峰学園　』

ここを卒業すれば人生の成功を保障する・・・なんて書かれたら行くしかないと思う。
だけど、世界を飛び回る『超高校級の手品師』や
試合で決めたシュートは千本以上の『超高校級のサッカー選手』などと

仲良く慣れるのだろうか・・・

まぁ会ってみなければわからない、そういう気持ちでここまでやってきた。
どんな学園生活が待ち受けているかワクワクしながら玄関ホールに向かった。

だけど、玄関ホールに入ったとたん・・・

夢川紗音
「え・・・なにこれ・・頭が・・・目が・・・回る・・・・・」

そういってその場に倒れてしまった。

＊＊＊
『・・・ようこそ・・・絶望学園へ・・・』

始まりの前の始まり（後書き）

はい・・・すみません、がちですみません・・・
次からが本編でございます。

始まり・・・

気がついたら机で寝ていた。

夢川紗音
「あれ・・・確か私は玄関ホールに入って・・・」
思い出そうとするが頭が痛くて何も思い出すことができない。
時計を見てみると九時をさしていた。

夢川紗音
「あれ・・・確か集合時間って・・・」
そう思ったが気にしないことにした。
辺りを見回すとそこには奇妙な風景が広がっていた。
それは、巨大な鉄板によってふさがれた窓だった。

夢川紗音
「なに・・・これ・・・」
窓についた鉄板はどうやっても取れそうにない。
部屋の中を探索して見つけたのは一枚の紙だった。
そこに書かれていたのは
『ようこそ絶望学園へ

あなたはこれからこの学園で生活していただきます
あなたにはこれからさまざまな絶望が降り注ぎますが
それを乗り越えて見事卒業したならば
人生の成功を保証いたします　　』

との内容だった。

夢川紗音
「絶望学園？ここは希望ヶ峰学園じゃないの？」

そんな疑問をもちながら私は玄関ホールに向かった。

～玄関ホール～

そこにはすでに１４人の新入生が集まっていた。

夢川紗音
「おくれてすいません・・・気づいたら教室で寝ていて・・・」

二宮香織
「え・・あなたも？私たちもそうなのよ」

夢川紗音
「え・・そうなの？」

成島亜鬼斗
「なにかわかるかと思って玄関ホールに来たがわかったのは出口がないってことだけだ」

そういわれ入ってきたはずの入り口を見ると大きな鉄の扉で封鎖されていた。

成島結衣
「まぁ・・・閉じ込められたってことね・・・あとこれ」

渡された紙に書いてあったのは全員のプロフィールだった。

夢川紗音
「これは・・・？」

成島結衣
「あのレターケースに全員分置いてあったのよ、まぁそれでみんなのことを覚えろってことだと思うけど・・・」

渡された紙を見ると、十五人の名前、『超高校級』のなんなのか、まで詳しく書かれていた。
それを見終わった直後、

＊＊＊
『マイクてすっ、マイクてすっ、聞こえてるよね？・・・えぇ・・・みなさん、いまから入学式を行います、至急体育館まで来てください・・・』

この場にはふさわしくない能天気な声が聞こえた。

成島結衣
「入学式・・・まぁいってみる価値はあるわね・・・」
そういって玄関ホールを出て行った成島さんに続き全員が続々と体

育館へ向かった。

舞浜姫

「いきなりで驚いてるかもしれないけど・・・あなたも来た方がいいわよ・・・」

そういわれたので仕方なく私もいくことにした・・・

入学式

～体育館～

体育館に全員が集まった。

＊＊＊

『全員お集まりのようですね・・・それでは入学式を始めます』

その声とともにリズミカルな音楽が聞こえてきた。

～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪

その音楽が鳴り終わると壇上にひとつの影が・・・

＊＊＊

『やぁみなさん・・・ご入学おめでとうございます。申し遅れましたがわたくしは学園長のゲルニカと申します・・・』

そこに立っていたのは兎のぬいぐるみだった。

ゲルニカ

『くれぐれも兎のぬいぐるみとお間違えがないように・・・・キヒヒッ』

それに対して一番最初に口を切ったのは成島君だった。

成島亜鬼斗

「おい、俺たちをこんなところに閉じ込めてどういうつもりだ！！」

そういってゲルニカをつかんだ。

ゲルニカ
『・・・・・・・・』

成島亜鬼斗
「・・・何とかいえよゴラァ！！」

ゲルニカ
『・・・・カチッ・・・・カチッ・・・・カチッ・・・・』

静寂に鳴り響く機械音・・・なんかいやな感じがする・・・

夢川紗音
「・・・何？この音・・・」

音はな鳴り続けている。

ゲルニカ
『・・・・カチッ・・・・カチッ・・・・カチッ・・・・』

成島亜鬼斗
「・・・マジでなんだこの音は・・・」

次第に音は大きくなる。異変に感じたのは舞浜さんだった。

舞浜姫
「成島君！！それを思いっきり投げて！！」

成島亜鬼斗
「は・・？・・・どういうことだ？」

舞浜姫
「いいから早く！！死ぬわよ！！」

その言葉でようやく

成島亜鬼斗
「チッ・・・わぁったよ・・・」

そういって成島君はゲルニカを思いっきり投げた。

ゲルニカ
『・・・・カチッ・・・・カチッ・・・・カチッ・・・・ドガァン！！』

ゲルニカはいきなり爆発し、その場にいた全員は一気に凍りついた。

成島亜鬼斗
「ど・・どうなってんだ・・・」

ゲルニカ
『・・・あぁ・・・惜しかった・・・もう少しでぐちゃぐちゃのドロドロだったのに・・・』

残念そうにそういうゲルニカ。

ゲルニカ
『まぁ・・・いい脅しにはなったかな・・・君たちをここに集めた

のはほかでもない、いまから始まる絶望サバイバルに挑戦してもらうためさ』

その言葉に対し舞浜さんは

舞浜姫
「絶望サバイバル・・・私たちは希望ヶ峰学園に入学しにきたんだけど・・・」

その言葉に対しその場にいた全員が「そうだそうだ」などの野次を飛ばしていた。

ゲルニカ
『・・うるさいなぁ・・・決まったことなんだから文句言わないの・・・次なんか言ったら脅しじゃすまないんだからね・・・』

その言葉で全員の野次が飛ぶ。

ゲルニカ
『・・まぁ、ここを出れないわけでもないんだけどね・・・』

その言葉の意味はよくわからなかったが後々身をもって感じた。

舞浜姫
「どうしたら出られるの・・・」

舞浜さんがそう聞くと

ゲルニカ
『簡単なことだよぉ～この中にいる誰かを殺せばいいんだ♪』

・・・その場に訪れる沈黙・・・

その沈黙を破ったのはやはり舞浜さんだった・・・

舞浜姫

「それは・・・どういうこと・・・」

ゲルニカ

『ここは仮にも教育機関、悪いことをした生徒には退学という名目で出て行ってもらうのさ♪まぁそれができなければ一生ここで暮らすことになるんだけどね』

私は聞いた

夢川紗音

「一生って・・・？」

ゲルニカ

『一生は一生だよ♪死ぬまでだよ。まぁ、それがいやなら人を殺すことだね。』

その言葉に誰もが口を閉ざす。

ゲルニカ

『ってことでこの話はおしまぁ～い♪まぁ、入学式ももうおしまい。最後に入学祝として君たちに生徒証をプレゼントするよ』

そういって渡されたのは青いプレート。中を開くと自分の名前が表示された。

ゲルニカ
『開くと持ち主の名前が表示されるようになってるよ♪像に踏まれても、水につけてもどんなことをしても壊れない仕組みだよ。あと、中には校則とかが書いてあってそれを破るとお仕置きが待ってるからね』

そういってゲルニカは校則お読み初めた

ゲルニカ
『校則
１ここで一生を過ごしていただきます
２出たい場合は殺人をしてください
３ただしただでは出れません
４ａｍ７：００～ｐｍ１０：００までを昼時間、ｐｍ１０：００～ａｍ７：００をよる時間とします
５個室以外での故意の睡眠は罰則とします
６夜時間は食堂を封鎖します
７開いてない扉は壊さないでください
８学園長への暴力行為は禁止です
９校則は随時追加されます
以上　　』

そういってゲルニカは姿を消した。

その場は沈黙に包まれていた。

～♪～♪～♪

ゲルニカ
『ｐｍ１０：００になりました。生徒の皆さんは宿舎棟に移りぐっすりお休みください、鍵は部屋の中においておりますので各自保管してください。あと、部屋には男子は工具セット、女子は裁縫セットと人体急所説明図がおいてあります。ぜひ使ってください・・・では、よい夢を・・・』

と放送が流れた。

舞浜姫
「考えても仕方ないわ、今日はぐっすり寝て明日またみんなで食堂に集まりましょう」

そういわれ全員がうなずき宿舎棟にむかった。
ベットにねっころがってわかったことがある。窓の外が見えなくわからなかったが、さっき時計が指していた９時は夜だったのだと・・・

この日から私たちの絶望サバイバルは始まった。

絶望の翌日（前書き）

はい、おはこんにばんは～

すいません、略しましたｗｗ

不定期な更新で申し訳ございませんｍ（＿＿）ｍ

絶望の翌日

ゲルニカ
『オマエラ。おはおうございます。ａｍ7時となりました。朝です、起きてください。』

・・・ブツン・・・

その不吉な目覚ましによって目が覚めた。

夢川紗音
「・・・朝・・かな・・・」

目が覚めた私は部屋をぐるりと見渡した。
この部屋にはシャワー室、ベッド、タンス、床用クリーナー、裁縫セットがあった。

夢川紗音
「ふわぁ・・・よく寝た・・・これからどうしよう・・・」

そう思いながら部屋の扉を見てみると紙がおいてあった。

紙には

『
皆様、おはようございます
成島結衣です。
これからの事について話し合いたいので

８時までに食堂に集まっていただけるとうれしいです
』
と書かれていた。

夢川紗音
「食堂・・・か。朝ごはん食べるついでにいこっかな♪」

そう考え私は食堂に向かった。
そして部屋を出ると、

＊＊＊
「あ・・・紗音ちゃん・・・だよね？」

声のした方向を向くと、そこには藤田優花がいた。

藤田優花
「あ・・・あってたあってた。おはよ～、紙見たんだよね？」

夢川紗音
「う・・・うん、そうだよ」

私がそう答えると

藤田優花
「そかそか～やっぱり『超高校級の生徒会長』は一味違うね、おまけに双子にはあの不良が・・・って私ばっかしゃべりすぎちゃったかな？まぁ、食堂に向かおうよ。あ、あと私のことは優花でいいから♪」

そういって食堂に向かおうとした優花に対して、

夢川紗音
「あ・・・私は、紗音でいいから・・・呼び捨てで・・・」

そういうと

藤田優花
「うん、じゃあいこうか・・紗音♪」

夢川紗音
「うん、優花♪」

私はこのとき、この絶望的な状況で友達ができた事にとてもうれしく思った。

～食堂～

食堂に優花と一緒に行くとそこには昨日玄関ホールで見かけた人々がちらほらと集まっていた。

成島結衣
「藤田優花さん、夢川紗音さん、来ていただきありがとうございます。もうそろそろ８時なので席についてお待ちください。」

そういわれたので私と優花はみんなが座っているテーブルの席に着いた。

＊＊＊
「お二人様おはよ～」

そう声をかけてきたのは

赤森海人
「昨日はよく眠れた～？おれっちは全然だし・・・怖くて寝れーねの。マジまいっちゃうよね」

『超高校級のサッカー選手』、赤森海人だった。

藤田優花
「私はぐっすりと眠れましたわよ。」

夢川紗音
「え・・・あ・・・わ・・・私もぐっすりと・・・」

赤森海人
「マジかぁ～、もしかして眠れなかったの俺だけだったりすんか？うっわ、めちゃくちゃ恥ずかしいんすけど」

そういった赤森海人に対して声をかけてきたのは、

二宮香織
「あの、私は眠れなかったです・・・」

『超高校級の女優』、二宮香織だった。まぁ無理もないと思った。女優という職業でこんな状況には絶対に巡り合えないのだから。

赤森海人
「マジか～よかったよかった、俺だけかと思ってあせったぜ～」

そういった直後

成島結衣
「えっと・・・全員はそろってないですが、約束の８時になったのでいまから話し合いを行いたいと思います」

こうして話し合いが始まった。

探索計画（前書き）

お久しぶりです！！長い事お休みしていてすみませんでしたm（＿＿）m地震などの影響で心でいた瑠芽ですが、ついに復活しましたbbってことで、短いですが、ぜひ読んでくださいww

探索計画

成島結衣
「皆さん、集まっていただきありがとうございます。
急に集まっていただいたのは他でもありません・・・今後について話し合うためです」

その言葉にその場にいた全員が息を呑んだ。
その沈黙を切り裂いたのはやはりこの人、

舞浜姫
「で・・・具体的にどうして行くの？」

みんなが最初に思ったであろうことを躊躇なく聞いた。

成島結衣
「舞浜さんの言う通りですね。ではこれから具体的に何をしていくか説明します」

成島さんはそういいながら何かを取り出した。

成島結衣
「昨日拾ったんですが、ここの地図・・・いえ、一階部分の地図です」

そういってテーブルに紙を広げた。

赤森海人
「すげぇ～こんなんなってたんだ～」

場の空気を気にせず一人ではしゃぐ赤森君。

成島結衣
「では、この地図を使って今後の活動について説明していきます」

あ・・・赤森君についてはスルーなんだね・・・うん、私も気にしない方向で・・・

成島結衣
「では説明します。食事をした後、この場にいるメンバーを４グループに分けたいと思います。
そして、グループごとにこのコピーした地図をもとに探索をしていただきたいと思います。
探索の内容は大きく分けて二つ。一つ目はここがどういう所なのか、二つ目は出口がないか。
まぁ、二つ目を優先的にお願いします。で、再集合時間を決めてそこでまた、探索の結果報告をすると　いうことにしたいと思うのですが・・・どうでしょうか？」

ここまで完璧になおかつ計画を短時間で決めたのはすごいと思う。
この場にいる全員がそう思っていると思う。

舞浜姫
「私はその意見に賛成よ・・・」

舞浜さんに続き

赤森海人
「俺っちも賛成だぜぇ～」

倉持紅葉
「私も・・・・賛成・・・・」
と、全員がさっきの計画について賛成の意思を表した。
成島結衣
「・・・わかりました、では食事後、どういうグループで、どのように行動するかを全員で決めましょう」
「「「賛成」」」
こうして、私たちが今後何をするかを話し合う事ができるようになった。
でも、この場にいない成島君は何をしてるんだろうか・・・
双子の成島さんはこんなにもがんばっているって言うのに・・・
そう思いながらも私は出てきた食事にむさぼりついていた。
よほどおなかがすいていたんだと思う。
やはり驚いたのは、あの大食いといわれている長谷部君が資料通り小食だという事だ。
そんな事を思いながら私は朝食を食べ終えた。
朝食を食べ終えて食器を片付けていると優花が話しかけてきた。
藤田優花
「ねぇ、紗音はどうする？誰と回る？」

と、聞かれたので私は

夢川紗音
「まだ決めてない・・・優花は？」

と聞き返してみると

藤田優花
「私は、紗音とあと誰かがいいなって思ってるんだけど・・・ダメかな？」

そう言われたので私は

夢川紗音
「全然いいよ。しゃべった事ない人といるより、優花といたほうが落ち着くし」

藤田優花
「じゃぁそれで決まりね」

そんな話をしながら私たちは食器を片付け、食堂へ戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6540q/

ダンガンロンパ　希望絶望儚き夢

2011年3月30日09時57分発行